

祈りのきずな 4月

エゼキエル書 5章～エゼキエル書34章

豊前教会（福岡）牧師 高橋 周也（たかはし ひろや）

1日(水)エゼキエル書 5章 1～4、17節

裁きとは、神さまの怒りではなく、関係の崩れに対する痛みの表現です。鋭い剣をかみそりのように用いて「剃るように」とは、まさに鋭く真剣に、神さまが私たちとの関わりを求めてやまない証です。痛みを伴う出来事の中で、私たちは神さまの熱情に触れます。「**主である私がこれを語った**」（17節）。

福岡教会と近藤浩久牧師、宮崎信義協力牧師（福岡・福津市）

2日(木)エゼキエル書 6章 3、10節

偶像礼拝とは、他宗教の意味ではなく、神さまの民が「神さま以外のもの」にしがみつ়くことです。「**高き所**」の祭壇は、人びとの心の拠り所であったかもしれませんが、しかし、神さまはそれらを崩されます。その出来事を通して、神さまは私たちに、本当に頼るべき方は誰なのか、改めて教えてください。

臼杵教会と松永正俊協力牧師（大分・臼杵市）

3日(金)エゼキエル書 7章 5～6、27節

「**終わりが来た**」と預言者は叫びます。危機とは、突然外からやって来るのではなく、私たちの内側で静かに熟していたものが露わになるのです。「**終わり**」は絶望ではありません。時に、死を通して、神さまと人との関係が問い直され、築き直され得るのです。これは、現代を生きる私たちへの呼びかけです。

別府国際教会（大分・別府市）

4日(土)エゼキエル書8章14～15節

タンムズ神のために泣く女たち(14節)。それは、子どもの誕生や養育と、自らの身体的・生理的に密接なかかわりをもつ、当時の女性たちの悩みや切実さの表れです。しかし、やはり神さまは、真の命の源がご自身であることを告げています。私たちの最も深い渴きを、生ける神に注ぎだしましょう。

大分教会(大分・大分市)

5日(日)エゼキエル書9章4節

町の不正を嘆き悲しむ人の額にしるしが付けられます。神さまは、痛みを痛みとして悲しむ涙をご存じです。現実の残酷さや誰かの無念さを前に、時に自分をそれらと切り離して守りたくなる。祈りに意味を見出せないことも。しかし、「あの世界」と「この私」はつながっているのです。そのままの心を神に。

豊前教会と高橋周也牧師(福岡・豊前市)

6日(月)エゼキエル書10章18～19節

「主の栄光が神殿の敷居の上から出て…」。「一見、難解な幻ですが、要点は「神の移動」です。神さまは神殿に留まらず、捕囚の民が連れ去られる方角へ進み出たという意味です。民には、絶望の旅路としか見えませんでした。それは、主が共に歩まれた時だったのです。あなたのいる場所が、神の居場所です。

苅田教会と佐藤清一牧師、児玉尚文教会主事(福岡・京都郡苅田町)

7日(火)エゼキエル書11章3、16節

アトウトウ(「共に」の意)ミャンマーの祈禱会では、クーデター軍に抵抗して現地の人びとが行っていた「鍋叩き」に連帯して、私たちが祈りの鍋を叩きます。その時いつも私の「我々は鍋の中の肉(安全だ)」との驕りが砕かれます。痛みを分かち合い、共に声を上げるその場所にこそ、主は宿られます。

飯塚教会と高屋澄夫牧師(福岡・飯塚市)

8日(水)エゼキエル書12章1～10節

捕囚の身となったかのように荷物をまとめ、壁の穴から出て行く。その預言者の行動は、言葉の届かない現実に対してなお、身をもって語り続けるアクションでした。そこから、相手との対話の道が開かれました。私たちが神に聞きつつ生きるなら、その姿そのものが、誰かに神さまの真実を語り告げるのです。

のおかた
直方教会と田中伊策いさく牧師（福岡・直方市）

9日(木)エゼキエル書13章10～11、19、22～23節

崩れかけた壁に漆喰を上塗りすれば、その壁の補修ができなくなるどころか、建物全体の崩壊を早めます。上辺うわべだけを取り繕っても、そのメッキはやがて剥げ落ち、むしろ人の命を蝕むのです。神さまは真実な回復を約束してくださっています。信頼し、現実と向き合うことからこそ、真の癒やしが始まります。

中間教会（福岡・中間市）

10日(金)エゼキエル書14章3、23節

偶像とは、神の民が心に抱く「神ならぬもの」です。自ら「つまずき」を置く神の民たちに、神さまは粘り強く語り続けます。現代社会は人びとの不安が煽られ、惑わされる世界です。そのなかでも見えるものに頼らず、神さまを尋ね問い続けましょう。神さまご自身が慰めと経験に意味を与えてくださいます。

ユンジョンヒョン
芦屋教会と尹正 鉉おんが あしやまち牧師（福岡・遠賀郡芦屋町）

11日(土)エゼキエル書15章1～5節

ぶどうの木が実を結ぶのは「成果」なのでしょうか。日々の自分の仕事や取り組みに、やりがいや使命感（神さまとの繋がり）を感じられなければ、薪のように消費されてしまい、やがては燃え尽きます。この問題は、役に立つかどうかではなく、幹（命の源）である神さまにつながっているかどうかです。

いまさかつよし
折尾教会と今里 豪 教会主事（福岡・北九州市八幡西区）

12日(日)エゼキエル書16章6節

野に捨てられ、血にまみれていた赤子。その命を見つけ、神さまは言われました。「生きよ」と。清いから、正しいからではありません。死にかけていた無力な命が、ただ神の憐れみによって肯定されたのです。私たちの原点は、この恵みに満ちた命の宣言にあります。この命は、誰にも取り消せません。

枝光教会と岩崎一宏牧師（福岡・北九州市八幡東区）

13日(月)エゼキエル書17章22～24節

鷲やレバノン杉のたとえは、大国に頼る駆け引きの失敗を暴きます。私たちは目に見える大きな力に頼りがちです。しかし主は「**高い木を低くし、低い木を高く**」する方。神さまは、あえて小さく弱い枝を選び、大木に育てるのです。人知を超えて歴史を統べ治めておられる神さまに信頼を置きましょう。

東八幡教会と奥田知志・石橋誠一各牧師、藤田英彦・森松長生・牧野新各協働牧師（福岡・北九州市八幡東区）

14日(火)エゼキエル書18章1～4節

「父が酸っぱいぶどうを食べると、子どもの歯が浮く」との因果応報を、神さまは否定されます。神さまは、和解へ導いてくださるお方だからです。神さまは、死から命を呼び出し、私たちが過去から未来へと解放して下さいます。神さまのもとでは、分たれていた民同士も、新しい希望の関係を結びます。

八幡教会と久保田理牧師（福岡・北九州市八幡西区）

15日(水)エゼキエル書19章2、10節

「あなたの母は何か」。この哀歌は、手塩にかけた子を奪われ、自らも引き抜かれる母（エルサレム）の痛みの歌です。預言者は、歴史の闇に消える指導者以上に、彼らを育てた「母なるもの」の裂かれた心に寄り添います。この慟哭を主は忘れません。その涙は、神ご自身の痛みでもあるからです。

高須教会と三上渡牧師、山田雄次協力牧師、美登恭子音楽主宰（福岡・北九州市若松区）

16日(木)エゼキエル書20章9、44節

エジプトから現在に至るまで、裏切りの歴史が語られます。しかし驚くべきは、それでも神さまが民を見捨てなかったこと。神さまは、ご自身の名のために忍耐されました。私たちの信仰の歴史も失敗の連続かもしれません。それでも神さまは、私たちを手放しませんでした。「われ何をもちてこれに^{ともえ}応えん」(※)。

若松教会と永町友恵牧師(福岡・北九州市若松区)

17日(金)エゼキエル書21章9～10節

神さまの剣が鞘から抜かれます。気まぐれな暴力ではありません。歴史の責任を厳肅に問うのです。これまでうやむやにされてきた不正や罪に、メスが入ります。神さまが、痛みつつも腐敗した部分を切除せざるを得ないほどに、追い込まれている命があります。いつの日か必ず神の正義がもたらされます。

北九州教会と斎藤信一郎牧師(福岡・北九州市戸畑区)

18日(土)エゼキエル書22章29～30節

利益優先で安全が軽視され、立場の弱い人が切り捨てられる社会。その根底には「神の忘却」があります。「仕方がない」と構造的な悪を黙認するとき、私たちも共犯者になります。神さまが探しておられるのは、犠牲の上に成り立つ繁栄に「否」を突きつけ、破れ口に立って執り成し祈る人の存在です。

小倉春ヶ丘教会と千葉^{ひとし}仁志牧師(福岡・北九州市小倉南区)

19日(日)エゼキエル書23章35節

「生きよ」と肯定された命が、大国に依存し、自らを切り売りしていく。これは、裁かれる女の物語ではなく、尊厳を失っていく都市の悲劇です。神の賜物である命は決して取り消されません。しかし、歴史の暴力の中で踏みにじられることがあります。その痛ましい現実を、神は沈黙せず、直視されています。

企救^{きく}教会と原田義也牧師(福岡・北九州市小倉南区)

20日(月)エゼキエル書24章16～17節

最愛の妻を失い、涙を禁じられた預言者の沈黙。それは、剣を振るう神さまご自身が、言葉を失うほど傷ついていることの証しです。神さまの正義の剣は、神さまの心をも切り裂くのです。私たちが祈りの言葉さえ失うとき、神さまもまた沈黙しておられます。言葉にならない場所にこそ、神はおられます。

シオン山教会と加藤英治牧師（福岡・北九州市小倉北区）

21日(火)エゼキエル書25章1～3節

隣国の不幸を「あはは」と笑う国々。他者の痛みを喜ぶ冷酷な心に、神さまは厳しい目を向けます。隣人を「自業自得」と突き放すその冷笑を、神さまは悲しみます。それはまた、やがて自分自身をも焼き尽くすことになるでしょう。他者の痛みさえ、わがこととして共に嘆く時、そこに平和が始まります。

南小倉教会と谷本 仰 牧師（福岡・北九州市小倉北区）

22日(水)エゼキエル書26章2～5節

隣国の滅びを「商機だ」と喜んだ都市ティルス。その傲慢な繁栄は、波に洗われ、「引き網を干す裸の岩」と化します。他者の犠牲で肥え太る経済は、決して永続しないのです。数字や地位に人生を賭けて、何が残るでしょう。神さまの前に、立ち止まりましょう。私たちの命の錨いかりは不思議なる神の手に。

小倉教会とチャトゥルヴェディ由起子代表役員代務者（福岡・北九州市小倉北区）

23日(木)エゼキエル書27章26～27節

世界中の富を集め、着飾った巨大船。経済優先で突き進む現代社会そのものです。しかし、数字上の豊かさが命を守らないことを、私たちは知らされつつあります。沈みゆく船の中で積荷を惜しむ愚かさを捨て、同じ船に乗る小さな命の手を握ること。それが、本当の豊かさではないでしょうか。

富野教会と黄仁 坤ファンインゴン牧師、福田 昌 治しょうじ協力牧師（福岡・北九州市小倉北区）

24日(金)エゼキエル書28章 2 節

「私は神だ」と驕る王。私たちはそうは言わないかもしれませんが、「頼れるもの」に囲まれているかもしれません。進歩した技術や情報、専門家たちの声は、時に創造主を忘れさせます。「あなたは人であって、神ではない」。この言葉は、私たちが何に究極の信頼を置くのか、静かに、鋭く問うています。

門司港教会と石橋貞男牧師（福岡・北九州市門司区）

25日(土)エゼキエル書29章 6～7 節

頼りになりそうな「エジプト」も、折れて手を刺す「葦の杖」となり得ます。人の力への「期待」は欲望と紙一重。実は、その失望こそ転機なのです。自分の満足を求める姿勢から、神さまの信実を積極的^{ゆだ}に待ち望む「希望」へ。決して折れない杖である主に、すべてを委ね、新しい一歩を踏み出しましょう。

門司教会と桐原恩恵協力牧師、森裕貴教会主事（福岡・北九州市門司区）

26日(日)エゼキエル書30章 3 節

「主の日」が近づきます。それは輝かしい光の日であり、これまで覆われてきた不都合な真実さえ明らみに出されるでしょう。恐れを覚えるほどの光ですが、それは神さまが、見て見ぬふりをされてきた傷や不正に、正面から向き合われるからです。神さまは、痛みを通してでも、命を回復へと導かれます。

インドネシア伝道と野口日宇満宣教師のために

27日(月)エゼキエル書31章10～11節

どの木よりも高くそびえ立ったレバノン杉も、根元から切り倒されます。他人との比較で優越感^{ひた}に浸っても、それは虚しいものです。神の園のエデンの木々でさえ、その高さを羨^{うらや}みました。しかし、神さまは、高さではなく、命の水に深く根を張る安息へ招いてくださっています。もう、競わなくてよいのです。

国際ミッション・ボランティアの働きのために（佐々木和之氏・ルワンダ）

28日(火)エゼキエル書32章18～19節

かつての英雄たちも皆、陰府に横たわります。死は平等な現実です。権力も名声も、死を超えて持ち運ぶことはできません。神の前に、地上のすべての飾りは意味を持ちません。私たちは「裸で母の胎を出たように、裸で帰る」のです。死の陰の谷にあっても、主はあなたを見失わず、私たちを離しません。
シンガポール国際日本語教会（IJCS）のために

29日(水)エゼキエル書33章7節

危険が迫る時の沈黙は、愛ではありません。見張り人の務めとは、断罪と脅迫ではなく、神の恵みに立ち返るようにとの呼びかけです。愛を見失っている友に寄り添い、本来の居場所（神の愛）へと、勇気をもって招きたい。私たちを通して語られる神さまの愛の呼び声が、誰かの命を、身も魂も救うのです。
アジアバプテスト女性連合（ABWU）のために

30日(木)エゼキエル書34章11～16節

人間の牧会には限界があります。しかし、「わたし自身が牧者となる」と誓う神の愛に終わりはありません。暗雲の日にも、あなたを探し出し、背負うのは神さまご自身です。これまでも、これからも、神さまが私たちを導いてくださいます。神さまと私たちの旅路は永遠に続きます。主にある平安を祈ります。
アガペホーム（カンボジア）のために

【2026年度全国発送①は4/22です】

- 1 役員会よりお知らせ(含：26年度活動予定＆書面総会のご案内)
- 2 第54回女性連合総会議案提出のお願い
- 3 事務局よりお知らせとお願い
- 4 会計からのお願い
- 5 沖縄祈り便&添え状①
- 6 信徒大会のご案内(8/5〔水〕・大名クロスガーデン〔福岡〕)
- 7 パートナーシップ伝道(8/22〔土〕～8/26〔水〕・韓国)のご案内
- 8 『世の光』オンラインサロンのご案内(7/20〔月・休〕)

お手元に届きましたら、ぜひ皆さままでご確認ください。